氏　　名	知念　真樹
学位の種類	看護学博士
学位記の番号	甲　第２号
学位授与の日付	平成 19 年 3 月 10 日
学位論文題目	保健師の仕事の「よりどころのゆれ」についての一考察 －沖縄県および市町村保健師を対象とした質問紙調査(2006)から－
論文審査委員	主査　沖縄県立看護大学教授　池田明子 副査　沖縄県立看護大学教授　前田和子 副査　沖縄県立看護大学教授　宮地文子

学位論文の内容の要旨

1. 緒言

近年、保健師を取り巻く環境はめまぐるしく変化してきている。平成9年の地域保健法の全面施行により、県と市町村の役割が明確になった。それに伴い、県保健師はこれまで直接住民サービスを行っていた立場から一転して、保健所機能強化のために従来よりも広い視点に立ったコーディネーターの立場で仕事をすることになった。また、組織的にも保健所と福祉事務所が統合し、それに伴い保健師も従来の一課集中から各課各分野へ配置され、それぞれの部署でその専門性を発揮することになり、業務内容及び組織や勤務体制の大きな変化への適応を迫られている。

一方、市町村においても、保健師の活動分野が福祉分野等へも拡大したことに伴い、配属先や役割の多様化が生じている。さらに、昨今の行財政改革、地方分権の推進、市町村合併等を背景とした地方自治体そのものの改革が行われ、小さな政府をめざしてアウトソーシングが促進されており、保健サービスを担ってきた市町村保健師の存在意義や活動の方向性が見えにくくなっている。

また、沖縄県は戦後約半世紀にわたり、県保健婦が市町村に駐在して業務をおこなう保健婦駐在制というシステムが存在したが、平成9年の地域保健法施行に伴い廃止された。

このような社会の変化に伴い、保健師に期待される役割も大きく変わってきており、保健師の「仕事のよりどころ」もゆらいでいることが推察される。

そこで本研究では、沖縄県内に勤務する保健師の職場環境、離職の意向、仕事満足度、理想の保健師タイプ、「仕事のよりどころ」を把握し、「仕事のよりどころ」と理想の保健師タイプとのギャップおよび「仕事のよりどころ」のバラツキから「よりどころのゆれ」をとらえることを試みた。

2. 用語の操作的定義

1)「仕事のよりどころ」

本研究では、就職や異動、転職、離職など、人生を左右する仕事の大きな転機にぶつかったときに判断の一番の決め手となった考え方を「仕事のよりどころ」と操作的に定義する。

「仕事のよりどころ」を把握するための質問紙作成にあたり、Schein E(1990).の「キャリア・アンカー」の概念をもとに8つの選択肢を設定したが、本研究では、経験の浅い保健師や新人も対象に含めており、Schein の定義するキャリア・アンカーと区別するために、「仕事のよりどころ」という用語を用いた。

2)「仕事のよりどころ」と理想の保健師タイプのギャップ

本研究では、理想の保健師タイプと「仕事のよりどころ」が一致するものを「仕事のよりどころ」と理想の保健師タイプの＜ギャップがない＞、異なるものを＜ギャップがある＞と操作的に定義する。

3)「仕事のよりどころ」のバラツキ

質問紙調査で自分の人生を左右する仕事の大きな転機にぶつかったとき、判断の決めてとなった考え方(判断のよりどころ)を8つの選択枝から複数回答で求めた。その結果を中央値によりバラツキの多い群と少ない群の2群に分割した。

4)「よりどころのゆれ」

理想の保健師タイプとのギャップと「仕事のよりどころ」のバラツキから「よりどころのゆれ」を定義し、ギャップの有無とバラツキの多少の組み合わせにより、下表の様に4パターンに分類した。

	ギャップあり	ギャップなし
バラツキ多い	ゆれ(＋, ＋)	ゆれ(−, ＋)
バラツキ少ない	ゆれ(＋, −)	ゆれ(−, −)

3. 研究方法

1) 調査方法;自記式質問紙調査

2) 対象:沖縄県及び県内市町村に勤務する全保健師(404 人)

3) 調査期間:2006 年 5 月 29 日〜6 月 10 日

4) 質問紙の配布及び回収方法:郵送法

5) 倫理的配慮:個人のプライバシー保護のため、質問紙調査は無記名で実施した。調査に際し、調査用紙に趣旨説明文を添付し、調査用紙の返信をもって調査に同意したものとみなした。

6) 統計解析方法:統計解析を行う際、ソフトウェアは、SPSS for Windows(ver.10.0J)を使用し、ノンパラメトリック検定、平均値の差の検定を行った。

7) 調査項目:「よりどころのゆれ」に関係すると考えられる要因を調査項目として下記のように選定した。

(1) 個人属性:年齢、性別、婚姻状況、出身地、勤務年数、職歴離島・へき地の経験年数など

(2) 組織に関する要因:勤務先、所属部署、上司の職種、保健師数、昇進の機会など

(3) アサーション度:平木典子の「アサーション・トレーニング」を参考に、基本的アサーション権に基づく 5 つの質問項目を作成した。

(4) 仕事満足度:仕事満足度の測定スケールとしては、Ellenbecker による Home Healthcare Nurses' Job Satisfaction Scale (HHNJS)を日本の保健師に併せて内容を改変して使用した。

(5) 支援システム: 相談できる人の有無、サポートシステムの有無と必要性

(6) コンピューターや携帯電話の活用状況

(7) 5年以内の離職の意向

(8) 「仕事のよりどころ」:Schein.E の8つのキャリア・アンカーを参考に質問項目を作成した

(9) 理想の保健師タイプ:Schein.E の8つのキャリア・アンカーを参考に質問項目を作成した。

4. 結果

1) 回収率;61.9% 勤務先別回収率;県(65.8%) 市(63.3%) 町(44.0%) 村(43.5%) 特定町村(79.4%)

2) 「よりどころのゆれ」パターンの分布は、ゆれ(−,−)14.7%、ゆれ(+,−)19.8%、ゆれ(−,+)17.9%、ゆれ(+,+)47.6%の割合であり、理想の保健師タイプとのギャップと「仕事のよりどころ」のバラツキが大きい群が半数近くを占めていた。

3) 「よりどころのゆれ」パターンを「仕事のよりどころ」別にみると、[専門分野]を選択した群でゆれが大きく、[ライフスタイル]群と[地域貢献]群ではゆれが小さい傾向が見られた。また、仕事満足度との関連では、「よりどころのゆれ」の小さい群(− ,−)の満足度が相対的に低く、ゆれの大きい群(＋,＋)の満足度が高かった。「よりどころのゆれ」パターンとの保健師の勤務先、年齢、性別、必要とされる支援システム等とは統計学的な関連はみられなかった。

4) 「よりどころのゆれ」パターンの特徴は下表のとおりであった。

ゆれ（−,−）群	理想の保健師タイプとのギャップがなく、「仕事のよりどころ」のバラツキも少ないパターン 全体の14．7%を占める 他の年代に比べて相対的に30代が多い 他のパターンに比べ[ライフスタイル]を「仕事のよりどころ」として選んでいたものが多い。 支援システムで『行政・管理研修システム』があがっていた。 仕事満足度が最も低い
ゆれ(+,−)群	理想の保健師タイプとのギャップはあるが、「仕事のよりどころ」のバラツキが少ないパターン 全体の19．8%を占める 県と市に多くみられ、町・村や特定町村では少ない。 他のパターンに比べ[専門分野]をよりどころとして選んでいるものが多い 5年以内の自主離職予定が少ない
ゆれ(−,+)群	理想の保健師タイプとのギャップはないが、「仕事のよりどころ」のバラツキが多いパターン 全体の17．9%を占める 他のパターンに比べ、相対的に男性の占める割合が多い 他のパターンに比べ[ライフスタイル]または[住民貢献]をよりどころとして選んでいるものが多い 仕事満足度が最も高い
ゆれ(+,+)群	理想の保健師タイプとのギャップがあり、「仕事のよりどころ」のバラツキも多いパターン 全体の47．6%を占める 各年齢がだいたい同じ割合で存在している 他のパターンに比べ[専門分野]をよりどころとして選んでいるものが多い 仕事満足度の平均が'ゆれ'(−,+)に次いで高い

5) 必要とされる支援システムは、「よりどころのゆれ」パターンや勤務先等に関係なく、"事業内容・閲覧システム""カウンセリングシステム""インターネット相談システム"が上位にあがっていた。

5. 考察

1) 「よりどころのゆれ」パターンの特徴について

(1)ゆれ(−,−)に属する保健師は、自分のライフスタイルと仕事とのバランスを重視しているため、「よりどころのゆれ」は少ないが、仕事には必ずしも十分に取り組めずに満足度が低くなっていると考えられた。

(2)ゆれ(+,−)に属する保健師は、理想と現実のギャップはあるが、実際に仕事で何をすべきかを捉えているため、「仕事のよりどころ」として[専門分野]を選択していることが示唆された。

(3)ゆれ(−,+)に属する保健師は、理想とよりどころが一致しており、「仕事のよりどころ」の判断の巾が広いことを示している。

尾崎は、「ゆらぎ」とは、物事の基礎、システム、あるいは人の判断、感情などが動揺し、葛藤する事態であると定義する一方で、「ゆらぎ」を変化・成長・再生の契機ととらえ、「ゆらぎ」には、もともと「ゆらぐ」ことができる余地や幅が不可欠であると述べている。また、「ゆらぎ」に向き合い、多面的に吟味することで、「ゆらぎ」にいたずらに翻弄されずそれを活用していくためのしなやかな軸を育てることができると結んでいる。

本研究で「よりどころのゆれ」をとらえるための「仕事のよりどころ」のバラツキを、尾崎の<ゆらぐことができる

余地や幅＞と捉え、理想の保健師タイプとのギャップを＜ゆらぎの軸になる部分＞と捉えると、軸がぶれず、ゆらぎの幅のある ゆれ(−,+)に属する保健師は、自分のなかの「ゆらぎ」ときちんと向き合えている群と考えられた。

(4) ゆれ(+,+)に属する保健師は、理想と現実にギャップがあり、そのことが判断の基準となるよりどころを見えにくくしており、その結果多くの考え方からよりどころを模索しているのではないかと考えられた。また、このパターンには対象の半数が含まれること、パターン内の年齢構成も調査回答者と差がないことから、本調査対象者の現状を反映していることが示唆された。

2) 「よりどころのゆれ」パターンと仕事満足度との関連について

ゆれの大きな群の仕事満足度が相対的に高かったことから、自分が「ゆれている」ことに向き合い、めまぐるしい変化に前向きに適応しようとしていることが満足度を高めているのではないかと考える。要するに、「仕事のよりどころ」が「ゆれる」ということは、決してマイナス要因ではなく、むしろ、自分が「ゆれている」という事実と向き合い、それを多面的に吟味することで、自分のキャリアを振り返り深めていくチャンスになると考えられた。

6．結論

調査対象者の約半数を占めていた「よりどころのゆれ」パターン(ゆれ(+,+))の特徴は、理想と現実にギャップがあって「仕事のよりどころ」のバラツキも大きいが、幅広い判断基準を「仕事のよりどころ」としており、仕事満足度は比較的高かった。また、仕事満足度が最も高かった「よりどころのゆれ」パターン(ゆれ(−,+))の特徴は、理想と現実にギャップがなく、「仕事のよりどころ」のバラツキは大きいが、自分の中のゆらぎと向き合い変化に対応できていると考えられた。

本研究は、保健師のおかれている不安定な現状を「よりどころのゆれ」として把握し、これを前向きに支援する方向性を示すことにより、変革期における保健師のキャリア開発に貢献できると考える。

論文審査の要旨

本研究は、沖縄県の保健師のおかれている現状を踏まえて、研究計画の段階では、離島・へき地町村の保健師の離職の要因と職務満足度との関連を明らかにすることを目的とした。しかし、先行研究の検討などを進める中で、離職という限られた現象のみにとらわれることなく、保健師が仕事を継続する上で拠り所にしているもの、仕事の転機に判断の決め手となった考え方を「仕事のよりどころ」と操作的に定義し、この「仕事のよりどころ」のゆれを捉えることによって、現在の保健師のおかれている不安定な状況を分析することを試みた。

1　本研究の特に優れた点は以下の通りである。

1）文献レビュー

看護職の離職、職務満足に関する文献から看護職のキャリア・サイクル、キャリア発達等に関する５０編以上の引用文献を検討し、特に概念枠組みの作成に有効に活用している。

2）研究課題の設定及び方法の独創性

ユニークな概念枠組みから用語を操作的に定義し、「仕事のよりどころ」のバラツキと理想像とのギャップを組み合わせて「よりどころのゆれ」を捉える試みは非常に独創的である。

3）保健看護学への貢献

本研究から得られた示唆は、沖縄県の保健師が直面している問題解決の一助となるのみでなく、広く保健師の継続教育やキャリア開発にも活用できるものであり、保健看護学の実践の向上に資するものである。

2　審査の結果、本研究の改善点は以下の通りである。

1）用語の操作的定義について

提出論文の操作的定義は“ゆらぎ”という表現であったが、他の学問分野の用語と区別しにくいとの指摘があり、「よりどころのゆれ」という表現に修正した。

2）概念枠組みについて

概念図が解りにくいとの指摘があり、文献レビューとの関連性を明示し、説明を加えた。

3）「仕事のよりどころ」のバラツキを捉えるカッティングポイントについて

中央値がカッティングポイントとして妥当であることをヒストグラムで図示した。

上記の点について加筆・修正された本論文は、保健看護の実践に大きく寄与するものであり保健看護学の発展に貢献できると評価された。

（最終試験結果の要旨）

本研究の文献レビューを通して専門領域の学識を豊にすることができ、今後さらに学習を深めることが期待できる。ただし、調査データの処理方法に関しては、妥当性の検討等の指摘もあり、統計学的手法についてもさらに学習を深める必要性が確認された。

以上、最終試験の結果、本論文は看護学博士の学位を授与するに値するものであり、申請者は、看護学における研究活動を自立して行うのに必要な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。